

レーモン・クノーにおける《ギリシア的調和》 について

— 書き言葉の死あるいはエクリチュールの誕生 —

尾形 弘人

はじめに

レーモン・クノーは、ある短いテキストの中で、「私はそこ [=ギリシア] から別人となって戻ってきた」(Eq.1., p.55) と記している。クノーがギリシアを訪れたのは1932年のことであり、彼はこの地において、処女小説『はまむぎ *Le Chiendent*』(1933) を書き始めたのであった。つまり、彼は《作家》となって戻ってきた。が、単なる文壇へのデビューが問題なのではない。クノーは「書く前に、作家は可能な限り言語を選択し、語られる必要があると思われることを、その言語の中で書いてゆく」(1955., p.65) と語っている。それ故、ここで問題となっているのは、自らが書くべき言語の選択、すなわち、《エクリチュール¹⁾》の誕生に他ならない。が、何故に《ギリシア》なのか。クノーが選択したのは、結局のところ《フランス語》ではなかっただろうか。

他方、この西洋文明発祥の地に関しては、「できることならば、私はギリシアの影響が太古の姿のまま現れて欲しい」(Eq.2., p.73.) とも語られている。ここで《ギリシア》は、もはや1932年のそれではない。それは《自然》と《人間》との間の、もはや永遠に失われてしまった《ギリシア的調和》へのオマージュである。「ギリシア人は〈自然〉に滅することもなければ、それを隷属させることもない。そうではなく、彼はそれと和合しつつも、自己の自律性を保持し、己の存在の横溢を実現するのである」(H.G., p.58)。しかしながら、このギリシア讃歌は単なるノスタルジーではありえない。クノーによれば、

《作家》の役割は、まさに、「この関係の両項 [=自然と人間] の間に調和を回復させること」(E.L., p.186) にあるのだから。

とするならば、この《ギリシア的調和》という理念は、クノーがエクリチュールを得た1932年のギリシアと、決して無縁ではないだろう。しかし、《言語の選択》と《人間と自然との調和》は、クノーにおいて、どのように関係しているのだろうか。本論では、この点を明らかにするべく、言葉と文学について書かれた理論的、評論的テクストを互いに対話させ、クノーのエクリチュールの誕生の場としての《ギリシア》を検討してゆきたい。

I. 1932年のギリシア旅行

「民衆の言葉を書き言葉の尊厳にまで高め、新しい文学、新しい詩の源泉とする」(1937., p.24) ことを企てたこの《作家》は、少年時代、生まれ故郷のル・アーヴルで話されている《民衆の言葉》に耳を傾けては、「話し言葉の性質と自律性に絶えず強い感銘を受けた」(E.G.C., p.72) という。後に主張される「書かれたものに対する口語的なものの卓越性」(1937., p.25) は、この言語経験に由来しているといえよう。しかしながら、他のところでは、この《民衆の言葉》の知識は、読書によって、特にアンリ・モニエの著作を通して得られたとされている²⁾。つまり、ル・アーヴルの言葉は、結局のところ《俚言》にすぎず、「民衆言語であるところのパリの言葉、つまりは、管理人の言葉、小商人の言葉」(E.G.C., p.104)を知るには、書物という媒体が必要だったのである。が、《パリの言葉を知る》ということは、クノーがノルマンディーの港町の出であるとしても、余りに凡庸な発見ではなかろうか。しかしながら、これが《読書》を通して見いだされたという事実に、極めてフランス的な言葉の問題が潜んでいるのである。

口語フランス語の権利は、今のところ、対話に用いられることのみである。数年前からは、小説の中の叙述部分にも用いられるようになったが、しかし、それは相変わらず非国民罪に処されたままである。つまり、口語フラ

ンス語は《思想》を表現する権利を持たないのである。生物学概論やヨーロッパの将来に関する試論を書くために、これが用いられた例は未だない。(C.V.C., p.58)

確かに、《俚言》としての民衆言語ならば、例えばモリエールのように³⁾、文体的効果として書かれることはあった。しかし、実に奇妙なことに、標準語ないし共通語として通っている《パリの言葉⁴⁾》は、それが《話されるがままに》書かれたことは、極めて稀なのである⁵⁾。それ故、「民衆の言葉を表音文字法的に記録した最初のひとり」(E.G.C., p.103)であるアンリ・モニエは、例外的かつ逆説的にも、《書き言葉》における《民衆》の不在を若きクノーに示したのである⁶⁾。

しかしながら、もしフランス語が、例えば英語のように、書き言葉と話し言葉との間に目立った差異を持たなければ、ここには問題などあり得なかったであろう。「そこ[=英語]においては、ベルリッツの話し言葉とアカデミックな言葉との間に、いかなる裂け目もない(この言語で書かれた科学的文章の心地よさはこれに由来している)」(1955., p.85)。しかるに、アカデミーの伝統に忠実なフランスにおいては、「実際に話されているがままの現代フランス語の統辞法と書かれたフランス語の統辞法は、後者とラテン語との相違ほどにも違っている」(C.G.R.D., p.40)。つまり、フランス人は、母国語の中であって、いわば《二言語併用者》となっている。しかしながら、「大抵の場合、二言語併用者は、いわゆる《文明》言語、すなわち、少なくとも数千万の人々が話している言語を採用する」(1955., p.65)のに対し、フランス語においては、大多数の《国民》が話している言語は書かれず、逆に《文明》言語であるところの書き言葉は、いまや誰も話さないのである。

しかも、《二つのフランス語》というテーゼは、クノーの奇想などでは決してなく、言語学者J. ヴァンドリエスの『Langage』に学んだ客観的事実であった。クノーにとって示唆的であったのは、例えば次のような主張である(クノーによる引用)。

書き言葉と話し言葉との隔たりは、ますます大きくなってきている。[……] 単純過去や接続法半過去は、話し言葉ではもう用いられない。特に、語彙の違いは誰の目にも明らだ。我々は死語を書いているのだ……文語フランス語がラテン語と同じ運命に陥るであろうことは予想し得る。決定的に固定されてしまった規則と語彙とともに、それは死語の状態で保存されることになる。 (1937., p.14)

つまり、話し言葉を《非国民罪》に処する書き言葉は、それ自体、フランス語の純粹性の中で《死語》と化しつつあるのである。文学は文学言語を書き続ける限り自ら死に至るという逆説。しかも「大部分の作家は気づいてさえいない」(1955., p.65) という危機。しかし、《民衆》が学問言語としてのラテン語を書かなかった時代とは異なり、現代のフランスにおいては、伝統的な書き言葉が「(多かれ少なかれ効果なく) 学校で教育され続け、フランス学士院といった公的機関によって (巧みにというより稚拙に) 擁護され続けている」(1955., p.66) 以上は、ヴァンドリエスの予言の現実味はどれほどのものであろうか。この問いに明確な答えを与えたのは、1932年のギリシア旅行であった。

船の上で、私は現代ギリシア語を研究し、数人のギリシア人と、カサレヴザとデモティキとの闘争、すなわち、出来るだけ古代ギリシア語と異なるまいとする言語と現実に話されている言語との闘争について話し始めた。もともと、問題は今では決着がついている。デモティキが勝利を収めたのだ。 (1937., p.16)

こうして、クノーは母国語に見られる《二つの言語の対立》が、この地においては、すでに、しかも、彼が示唆を受けた言語学者の予言どおり、文学言語の死という結末をもって終結したことを知ったのである。さらに決定的なことは、「《カサレヴザ》(純粹言語)はジャーナリストと公務員によって常

用されており、《デモティキ》(民衆言語)は詩人によって用いられている」(L.A., p.51)という事実である。つまり、詩人が《純粹言語》を語るフランスとは逆に、ギリシアにおいては、文学言語は《民衆の言葉》とともにある。大いに意を得て、クノーは《書き》始めた。

この新しい言語を肯定するためには、まず第一に、何か俗受けする出来事を小説にするのでなく(というのも、意図を取り違えられる恐れがあるから)、ラテン語の代わりに現代語を用いて神学や哲学を論じた十六世紀の人々にならい、何か哲学的な小論を口語フランス語で書けばよいのではないか、そして、手元に『方法序説』があったので、これをこの口語フランス語に翻訳すればよかろう、と私には思われた。私が《何か》を書き始めたのは、このような考えを抱いてのことであり、この《何か》が、後に『はまむぎ』と題される小説となったのである。そこには民衆の言葉の正確な引写しがたくさん見られる(1937., pp.16-17)

こうして、クノーは自らのものにして民衆のものでもある言語を選択し、逆説的にも、いまだ誰のものでもないエクリチュールを得て、ギリシアから戻ってきた。《別人=作家》となって戻ってきた。

II. ギリシア的調和

それでは次に、クノーが《太古の姿》のまま現れることを望んだ《ギリシアの影響》とは、何であったのだろうか。

古の芸術は、そして古の科学も、人間と自然との共同作業として現れていたと、私には思われる。私が言わんとするところは、人間の技巧的行動は、人間的な目的を実現しつつも、自然が計画するところを助け、それに協力することを目指していた、ということである。(E.L., p.178.)

例えば、ギリシア建築においては、アポロンを祭っていたデルフォイの風景や、アクロポリスの麓のディオニュソス劇場のように、周りを取り囲む山々や空といった《自然》を考慮することなしには、《人間》の手になる《作品》は完全ではなかった。「変転と不変との常に悲劇的な合流点にあり、常に一瞬の中に宿るこれらの見事な遺跡の、その永続する生と日常生活との合致を、私はあえて〈調和のとれた〉と形容したい」(H.G., p.58)とクノーは述べている。ここで《変転と不変との常に悲劇的な合流点》とは、ニーチェが『悲劇の誕生』の中で語った「アポロンの精神とディオニュソスの本能、両者の敵対関係とアテネ悲劇における和解」(R.V.L., p.69)に他ならない。引用の関係で逆となったが、《アポロンの精神》とは合理性や体系性といった《不変》なるものの原理であり、《ディオニュソスの本能》とは《変転》、すなわち、狂気、破壊、混沌といったものを支配する原理である。《ギリシア的調和》は、《人間》と《自然》との協力により、この《原理の対立》の和解を《作品》の中に表現していたのである。

クノーにとっては、文学という《作品》もまた、この《調和》の中に創造されねばならない。「古代都市の創設と分譲地の野蛮さとを比較してみよ」(E.L., p.179)とクノーは警告しているが、これはそのまま文学にも当てはまるのである。

言葉というものは、自然と同様にひとつの与件ではあるが、それは明確に限定された与件、すなわち、ひとつの特定言語であり、作家はこれを分譲業者のように手荒に扱ってはならない。そうではなく、彼はこの言語に協力し、その力を増大させつつ、その中に自らの作品を位置づけねばならない。(E.L., p.182)

ここにおいて、二つの《ギリシア》が時を超えてひとつとなる。というのも、《民衆の言葉》が《自然》であればこそ、クノーはそこに自らの《作品》を位置づけたのであるから。が、《民衆の言葉》が《自然》であるということ

は、どういうことなのか。

周知のとおり、《言葉》——正確には《言語》——は、共時的不易性と通時的可易性という、二つの《原理》のもとに成立している。この観点からいえば、両者が相互補完的に機能している限りにおいて、言語は《自然》であるといえる。しかしまた、言語が《自然》であるためには、《社会的》でもあらねばならない。つまり、言語の共時性は、それが社会の中に、つまり、《語る大衆⁷⁾》の中に根づいていなければ自然ではなく、また、その通時的な変化も、民衆のパロールの社会的実践から自然に生ずるものでなければならぬ。《自然言語⁸⁾》は、それがまさに《社会》的である限りにおいて、つまり、《民衆》の中にある限りにおいて、《自然》だといえるのである。

ところで、《自然》と《人間》に関するギリシア的理想は、《アポロンの原理》と《ディオニュソスの原理》との和解にあった。逆に言えば、両者の対立からは《非=自然》な《作品》しか生まれぬ。そこで注目すべきは、「古典主義者でありたいと望むならば、彼は自らをアポロンのと宣言するであろう」(R.V.L., p.69.) という記述である。つまり、古典主義は、自らが確立したフランス語の体系性、純粹性、不変性、すなわち、比喩的に《アポロンの精神》と呼べるものの保持にひたすら努めてきた。それは《ディオニュソスの本能》を巧みに隠蔽、排除してきたが、その結果は《死語》であった⁹⁾。古典主義は、「自然に対する人間の優越性を頼みとし [……]、言葉の生きた泉から、民衆という第一質料から、《具体的》で《人間的》な《生きた》関係の中で継続していくがままの言語の使用から、しだいに遠ざかる傾向にある」(E.L., pp.185-186)。

逆に、ロマン主義は、「人間に対する優越性を自然に与えることにより、まったく抑制を失い、別の意味で、パロールとエクリチュールとを、駄弁と文体とを混同する傾向にある」(E.L., p.186. 強調はクノー)。その帰結が《ヴェルバリスム》、すなわち、語られる内容よりも語る形式に対する偏愛であってみれば、ロマン主義は《アポロンの》抑制を失うとともに、過度に《ディオニュソスの》であったといえよう¹⁰⁾。つまり、言語の自然な変化をあえて逸脱し、

ついには、例えばマラルメの詩のように、「かつてフランス人のパロールが一度も発音することのできなかった、完全に書記的な統辞法」(E.L., p.184)を生み出したのである。これもまた《別の意味》で《死語》に違いない¹¹⁾。

こうして、古典主義もロマン主義も、ともに「自然からも、また、人間からも遠ざかってしまった」(E.L., p.186)。つまり、民衆とともにある《自然》な言葉ではなくなった。そこでクノーは《自然と人間との調和を回復させる》ために、文学的《書き言葉》から民衆の《話し言葉》へと立ち返るのである。1932年のギリシアにおいて、太古のギリシアを思いつつ。

III. 《自然》を失った言葉

しかしながら、「1870年以降のフランスの詩とここ数年のカタロニア絵画の言いなりとなり、人々はギリシアなど下らないと思ひ描くようになった」(H.G., p.56)。このような時代にあって、クノーはなぜ《ギリシア的調和》を語るのでしょうか。あるいは、ギリシア的なものを完全に失墜させた、ロマン主義以降のフランス文学は、《言葉の自然》との関係において、クノーの目にはどう映っていたのであろうか。

ロマン主義の終焉とともに文学に飽いた大衆を前にして、文学は《芸術のための芸術》を掲げて自らの殻に閉じこもるか¹²⁾、あるいは逆に、大衆の気を引くために、「他のあらゆる活動様式の中に、最も仰々しく、最もけばけばしく、最も人の目を欺くものを探しに行った」(A.C., p.66)。前者の場合、そもそも《芸術のため》の芸術なのであるから、《民衆の言葉》と《作家》という問題は成り立たない。それは「陰気な自慰行為」(Q.A., p.91)の中で、おとなしく《死語》と化してゆくであろう。問題は後者、すなわち、執拗に《言葉の自然》を切り売りする《分譲業者》たちである。購入者は様々であるが、本論では文学における《科学主義》に話しを絞ろう¹³⁾。

クノーによれば、ランボオの《錬金術》やマラルメの《書物》に始まり、アポリネールのカリグラムやシュールレアリストの自動書記に至るまで、文学は「(西洋の合理化主義的)科学が芸術の領域を蹂躪するがままに任せてき

た」(E.L., p.181) という。

この時[=ロマン主義の終焉]、文学者はロマン主義と詩がもはや嫌悪感をしか抱かせないことをよく理解した。彼らはこれを認め、大衆の賛同を得るためには、《学者》を装うしか、他によい方法を見い出さなかった。小説は社会学的な資料となり、医学的=心理学的な観察記録となった。小説家たちは医学アカデミーに入ったほどだ。ゾラは《実験小説》を書いた。詩は消え去り、演劇は学位論文の口頭審査とならねばならなかった。(Q.A., pp.89-90)

こうして文学は、「すべての芸術の中にある戯れと気晴らしという側面¹⁴⁾」(E.L., p.183) を自ら否定するに至ったが、これこそまさに《大衆》が求めるものではなからうか。が、文学は《大衆の賛同を得るため》に、最も稚拙な方策を取った。なにしろ、《科学的》ということは、「晦渋な」(E.L., p.181) ということであり、最も大衆受けしないものなのだから。さらに稚拙なことには、自然主義小説であろうと、シュールレアリスムの自動書記であろうと、実験文学は、科学の発展と文学のそれとの全く誤った類推から出発したのであった。つまり、「発見に対する探究の優位の原理」(Q.A., 93) や「不妊処理、あるいは、性的不能の原理」(Q.A., p.94) を科学から借用し、これを楯に、完成した《作品》ではなくして、素描、手帳、資料といった、いわば《実験中のもの》を提示するようになったのである。科学においては、仮説も問題提起的な価値を持つだろう。しかし、「芸術というものは、本質的に目的にまで到達すること、すなわち、作品を提示し、それが世に認められることにあ

る」(Q.A., p.94)。それ故、《大衆の賛同を得るため》に《科学》を偽装する文学は、皮肉なことに、「社会の全体が詩に対して抱いている嘆かわしい意見を正当化する」(Q.A., p.94) しかないのである。

《それは文学だ C'est de la littérature》は《それは分かりきったことだ》

を意味し、《文学的》と言えは《無意味》の謂である。そして《文学者》は、文学者が投げつけることのできる最も手厳しい罵りのひとつである。(A. C., p.64)

この侮蔑表現はロマン主義の終焉以降、徐々に大衆の間に蔓延していったが、それは、実は、文学者自身の「何だか訳の分からないマゾヒスト的な自尊心、得体の知れない自罰欲求」(Q.A., p.89) から生まれたものであった。見事な逆説である。というのも、「ロマン主義とともに集団から根こぎにされた文学」(Q.A., p.92) は、《大衆の賛同を得る》ために自らの芸術に毒づくことにより、それこそ、この侮蔑表現に相応しいものとなっていったのである¹⁵⁾。つまり、文学不信は社会に定着したが、文学は社会から孤立してしまった。ここに至って、問題は《話し言葉》と《書き言葉》との乖離にとどまらず、《民衆》と《知識人》との断絶にまで拡大しているといえよう¹⁶⁾。

さて、ここで《ギリシア》に戻れば、それはロマン主義の終焉とともに、その威光を完全に失したのであった。つまり、《ギリシア》の軽視、言葉の《非=自然化》、《文学》に対する全的不信は、完全な平行関係にある。ところで、クノーが《ギリシア的調和》に求めたものは、民衆が話す《自然》な言葉との協力関係における《作品》の創造であった。しかるに、科学主義的文学は、この意味でも、《作品》を生み出すことを怠った。

[……]科学と同様、経験的段階は、さらには実験的段階でさえ、最終段階ではない。秩序、方法、合目的性が(再び)現れる、もっと高次の段階があるのだ。そして、後者 [=文学] の場合、この段階は起源の出発点と変わらない。[……]我々は多様な実験を統合するような単一性へと回帰する。回帰するといったが、そもそも、そこから抜け出せるはずはないのである。というのも、唯一そこから出発してのみ、我々はこれらの実験を有する(制御し精通する)のであるから。(Q.A., p.93)

ここで問題となっている起源的《単一性》とは、言葉における《自然》と別のことではない。真の《言葉の実験》——別に科学を模倣しなくとも《文学》は言葉の実験である——は、最終段階にまで到達して、《自然》の中に、すなわち、《民衆の言葉》に回帰し、この「最も上質な作品を可能にする腐葉土」(E.L., 182.)に新しい言語の種を蒔かねばならない。とはいっても、ここで《作品》はもはや個別的著作ではない。そうではなく、《新しい社会》という広大な《作品》が問題なのである。

芸術、詩、文学は、(自然の(宇宙の、世界の)現実と社会の(人類の、人間の)現実を)表現し、(自然の現実と社会の現実を)変形するものである。[……]文学者は自分の職務を知らねばならない。そして、すべての生産者と同様に、社会生活に協力するのである。これら二つの間には矛盾など決してない。というのも、社会が芸術家に都合が悪ければ、彼はこれを変えてしまえばよいのである——これは単純なことだ。変えること、これもまた、協力することである。(Q.A., pp.94-95)

《社会を表現する》こととは、《民衆の言葉》にエクリチュールを与え、それに自らを語らせることに他ならない。これが《社会に協力する》ことになるというのは、これにより、「話すように書くことができず、その結果、自分が感じるように書く権利を持たない」(C.G.R.D., p.40) フランス人の不幸に終止符が打たれるからである。そして、《社会を変える》というのは、例えば、風習を改めるために記号表現を改変した中国の皇帝のように¹⁷⁾、エクリチュールを得た《民衆の言葉》は、新たな社会を作り上げる力を得るからである。つまり、問題は、一言でいって、「話された言葉に何らかの文体を与えること」(C.G.R.D., p.40)、これである。かつてビュフォンが言ったように、《文》は《人》であり、新しい文体は、新しい生活様式、新しい社会を生み出す。

ここにおいて、言葉の問題は文体の問題となり、エクリチュールの問題は人間的問題となる。[……]これら錯綜する諸問題の全てを通して、現実の問題となっているのは、実は極めて単純で直接的な問題である。つまり、人間、生活、現代の人間、現代の生活が問題なのである。(1955., p.91)

従って、文学が科学主義社会との共存を模索する時代にあつて、あえてクノーが時代錯誤的な《ギリシア的調和》を要請するのは、《書き言葉》と《話し言葉》の断絶に由来する、文学と社会との、作家と民衆との《離婚¹⁸⁾》を調停するためなのである。《民衆の言葉》という《自然=社会》へと立ち返り、これと協力して新しい《自然=社会》を作り上げること、これにより《それは文学だ》という侮蔑表現は、再び肯定的なものに逆転し、この時、社会は作家にとって《都合の悪い》ものではなくなるだろう¹⁹⁾。

IV. 言葉の《自然》とともにある《作家》

ならば、作家の「自然で本源的な機能」(L.E., p.181. 強調はクノー)とは何か。

単純に言って、詩人の仕事、そして散文作家の仕事は、自分と同じ言語を話す者たちの言葉を確立し、基礎付け、発展させ、美化することに協力することである。

言語の生命力ほどはっとさせるものはない。実際、この言語を話している民衆は、自分が他でもないこの言語を話しているのだと、どれだけ意識するものであろうか。[……]

詩人であれ散文作家であれ、作家たる者の務めは、この曖昧な意識、この自然な作品に手を貸し、この土台に基づき、この背景と調和しつつ建築することであり、その逸脱物を治癒することである [……]。(E.L., p.182. 強調はクノー)

ここでクノーは《美化》という語を用いているが、アカデミズムのそれとは、対象も態度も異にしていることは言うまでもない。アカデミーの伝統は、《民衆の言葉》につきものの「言葉づかいの誤り、リエゾンの誤り、不正確な発音、不的確な表現、間違った構文、勘違い、言い損ない」(1955., p.69)を^{デフランス}《禁止》することにより、フランス語の純粹性の^{デフランス}《擁護》に努めてきた。が、その結果は《書き言葉の死》であった。それ故、「フランス語の擁護は、まさに攻撃側の視点からなされねばならない」(C.V.C., p.61)。つまり、あえて《誤用の文法》を肯定し、これにエクリチュールを与え、「書かれた話し言葉」(1937., p.12. 強調はクノー)、すなわち、「現実には話されている言語に対応する第三のフランス語」(1937., p.19. 強調はクノー)を誕生させねばならない。もちろん、この新しい言語は、書き言葉に保持されている幾つかの表現形式——例えば、単純過去や接続法半過去——を失うであろう。しかし、だからといって、フランス語の《貧困化》を嘆く必要はない²⁰⁾。大いなる実りが約束されているのであるから。

ダンテの詩的神学を創造したのはイタリア語の使用であり、ルターの実存哲学を創造したのはドイツ語の使用であり、ラブレーやモンテーニュにおける自由の感情を基礎づけたのも、ルネサンスのネオ＝フランス語の使用であった。新しい言葉は新しい思考を出現させ、新しい思想は新鮮な言語を欲している。[……] 問題は《新しい言葉を一から十まで作り上げる》ことではなく、新鮮さを失った文法の凸凹した鑄型の中には流し込むことができないものに形を与えることである。(I.P.S., p.63)

しかし、この《形》が潜在する《民衆の言葉》自体は、これを明確に意識することはない。例えば、「現代ギリシアにおいて、純粹主義者の言語であるカサレヴザに対し、民衆言語に勝利させたのも、一般大衆ではない」(1955., p.93)。なぜか。それは「綴り字の維持、義務教育、公的な、行政的な、あるいは、厳粛な状況において、ひとつの言語から別の言語へと自動的に移行さ

せる無意識的行為」(I.P.S., p.62)が、二つのフランス語の差異を巧みに隠蔽し、その結果、民衆は《書き言葉》を《話している》と錯覚させられているからである。それ故、「彼 [=フランスの作家] の仕事、彼の作品は、言語的産婆術であらねばならない」(1955., p.67)。つまり、町中で人々に話しかけては《無知の知》を暴きたてたソクラテスのように、作家は《民衆》へと赴き、実は、《あの言語》ではなく《この言語》を話しているのだと、その《曖昧な意識》を覚醒させてやらねばならない。特に、これほど尊重される綴り字というものが、「悪しき習慣以上のものであり、ひとつの虚栄心である」(1937., p.25) ことを、はっきりと告げてやらねばならない。

[……]綴り字の合理的な改革は、少しずつ音声組織へと我々を導くであろう。その時、人々は、話されたフランス語が、どれだけ書かれたフランス語から遠いものかを知り、ついには、私がここで示そうとしているもの、すなわち、それが別の言語であることに気づくであろう。(1955., p.79)

厳密には、問題は綴り字の矯正ではなく、《初めて》エクリチュールを持つことになる《民衆の言葉》に、新しい綴り字を与えることにある。クノーにとって、それは「言葉の真正のリズム、正確な音響、真実の音楽」(1937., p.20)を反映するような「音声的綴り字 (ortograf fonétik)²¹⁾」(1937., p.25)であった。これによって書かれる新しい言語は、「己の口語的、音楽的自然を再び見出し、やがては詩的言語に、そして、新しい文学の生气に富む滋養分となるであろう²²⁾」(1937., p.26)。

おわりに

以上、我々はギリシアに関する二つの短いテキストから出発して、クノーのエクリチュールの誕生において《ギリシア》が果たした役割を見てきた。まとめると、クノーは1932年のギリシア旅行において、分裂した母国語の未来を、すなわち、《書き言葉の死》と《民衆の言葉》の勝利を見たのであった。

そして、《ギリシア的調和》は、言葉の《自然》と協力して新しい《作品》——《ネオ・フランス語》と、それによって可能となる《新しい思想》——を生み出すというヴィジョンを、クノーに与えた。それは言語的、文学的問題であるとともに、社会的、人間的な企てでもあった。というのも、この《作品》は、《知識人》と《民衆》とを和解させるはずのものであるから。「果実は実り、熟し、腐った。いま種子が飛び立つ」(1937., p.11)。そして、この新しい言語の種子は…… が、我々はここで口を噤み、最後にもうひとつの《ギリシア》へと、すなわち、『ギリシア旅行』と題されたテキストへと赴かねばならない。

この著作は、1932年のギリシア旅行と同時代に発表された評論のうち、『野線、数字、文字』に収録されなかったものを、およそ40年の後に再び取り上げたものである。だから、そこでは我々が検討してきた《ギリシア的調和》が語られている。注目したいのは、刊行にあたって、新たに補追として書き加えられた二つのテキストである。

ずばり《正誤表》と題されたテキストは、我々が先に見た『はまむぎ』の執筆経緯について訂正を施している。繰り返せば、この処女小説は、当初は、デカルトの『方法序説』の口語フランス語への翻訳となるべきものであった。しかし、そこには脚色があった。クノーが訳し始めたのは、『方法序説』ではなく、イギリスの詩人J.ダンの『*An Experiment with Time*』であった、というのである。もっとも、この潤色は理解できる。というのも、当時求められていたのは、「自分の方法の規則を説明するためにラテン語を放棄した」(1955., p.68) デカルトのような人物であったのだから。いずれにせよ、これは演出の問題である。重要なのはこの告白の動機である。

なぜ今になって、私はこのような訂正をしようと強く望むのであろうか。それは、この《ネオ＝フランス語》という問題が、重要性を減じたように思われるからである。というよりもむしろ、この主題について私が主張した理論は、事実によって裏づけられなかったことに気づいたのである。《ネ

オ＝フランス語》は、日常の言葉においても文学的使用においても発展しなかった。逆に、後退してしまった。《書かれたフランス語》は持ちこたえたどころか、補強されさえした。(Erta., pp.221-222)

とはいっても、当初から理論に誤りがあったわけではない。《現代フランス語の奇妙な発達》には、「数年前ならば、我々は正当にも、フランス語はひとつの危機に近づいており、それは致命的なものとなるだろうと、考えることができた」(C.E.F.M., p.223) とある。ならば、この《奇妙な発達》は何に由来しているのであろうか。別にアカデミーの権威が増したわけではない。綴り字も相変わらず不合理なままである。それは意外なところからやって来た。《テレビ》である。「他の人たちが(一般的に、ほとんど)正確なフランス語で自己を表現するのをテレビで見るうちに、フランス国民は、自分の自己表現の仕方に気を配り始めた²³⁾」(C.E.F.M., p.224)。インタビューを求められようものなら、正しく話さねば教養を疑われる。カメラを前にして標準語を用いねば笑い物となりかねない。こうして、《民衆》は《正しい》とされるフランス語を話す人々、例えばアナウンサーの言葉を無意識的に真似るようになった。そして後者の《話し言葉》は、学校で教育されている《書き言葉》なのである。従って、「日常の口語フランス語は、しだいに、書かれたものに倣うようになった」(C.E.F.M., p.225) と言っても、逆説にはならない。蔓延する英語もどきや過度に刺激的な宣伝言葉がフランス語の《純粹性》を脅かしてはいても、《民衆》は、結局のところ、多かれ少なかれ、《純粹》なフランス語を、すなわち、《死語》の運命が約束されているかに見えた、あの《書き言葉》を話すようになった。こうして、この新たな状況に置かれたフランス語に《自然》という語を用いるとしても、それは《第二の自然》、すなわち、《習慣》——言葉に絶えず気を配るうちに獲得された習慣——と言わねばならない。ここに至って、《自然》と《人間》との《ギリシア的調和》は、その微かな希望さえ永遠に失われてしまったようである。なにしろ、言葉の《自然》に《文体》を与えたのは、《人間》ではなく、《テレビ》という、いささか高価^{プレシユール}

な、いや、大いに^{プレシユ-}気取った《機械》なのだから。

註

*参照テキスト及び略合は以下の通りである。

B.C.L.: Raymond QUENEAU, *Bâtons, Chiffres et Lettres*, Gallimard, 《IDÉES》,1965.

V.G.: Raymond QUENEAU, *Voyage en Grèce*, Gallimard, 《NRF》, 1973.

E.G.C.: Raymond QUENEAU, *Entretiens avec Georges Charbonnier*, Gallimard, 1973.

.....
1937: 《Ecrit en 1937》 in *B.C.L.*, pp.11-26.

C.G.R.D.: 《Conversation avec Georges Ribemont-Dessaignes》 in *B.C.L.*, pp.35-47.

L.A.: 《Langage académique》 in *B.C.L.*, pp.49-52.

O.C.: 《On cause》 in *B.C.L.*, pp.53-56.

C.V.C.: 《Connaissez-vous le Chinook?》 in *B.C.L.*, pp.57-59.

I.P.S.: 《Il pourrait sembler qu'en France...》 in *B.C.L.*, pp.61-63.

1955: 《Ecrit en 1955》 in *B.C.L.*, pp.65-94.

Eq.1: 《Enquête》 in *V.G.*, p.55.

H.G.: 《Harmonies grecques》 in *V.G.*, pp.56-59.

M.I.: 《La mode intellectuelle》 in *V.G.*, pp.60-63.

A.C.: 《L'air et la chanson》 in *V.G.*, pp.64-66.

R.V.L.: 《Le rat, la vigne et le larron》 in *V.G.*, pp.68-70.

Eq.2: 《Enquête》 in *V.G.*, pp.73.

Q.A.: 《Qu'est-ce que l'art?》 in *V.G.*, pp.89-96.

E.L.: 《L'Ecrivain et le langage》 in *V.G.*, pp.178-186.

Erta: 《Errata》 in *V.G.*, pp.219-222.

C.E.F.M.: 《Curieuses évolutions du français moderne》 in *V.G.*, pp.223-226.

- (1) 同じ頃、ロラン・バルトは、「[……] 作家が普遍性の証人であることをやめて不幸な意識となるや (1850 年のころだが)、作家の最初のミブりは、過去のエクリチュールを引き受けるにせよ拒むにせよ、そうすることによって自分の形式の拘束を選ぶことだった」(『零度のエクリチュール』, 渡辺淳, 沢村昂一訳, みすず書房, 1971, p.6) と述べている。
- (2) Voir 《1937》, p.12; 《O.C.》, p.55; *E.G.C.*, pp.103-105.
- (3) Voir *E.G.C.*, p.104.
- (4) ここで《標準語》ないし《共通語》というのは、《専門用語》, 《俚言》, 《隠語》の使用は「文体的次元の問題」(1955., p.70) とされているからである。特に《民衆の言葉》と混同されやすい《隠語》に関しては、「フランス語を隠語に置き換えることが問題なのではないことを十分理解して欲しい。隠語はひとつの言語では決してなく、変化に晒されたひとつの語彙に過ぎないのだから」(1937., p.19) と語られている。
- (5) その稀な例として、クノーは L.F.セリーヌの『夜の果ての旅』を挙げている。が、クノーはそれを称賛しつつも、セリーヌの口語的文体は、散文作家のそれであり、詩人のものではなかったと述べている。Voir 《1937》, p.18.
- (6) クノー自身が認めているように、それは結局「書物の上だけ *Livresque*」(1937., p.11) のものであり (我々にとっては、だからこそ重要なのであるが)、その後の兵役 (1925-1927) が「それまで初歩的な知識しか持っていなかった、民衆のフランス語、隠語、パリっ子の言葉、方言を教える学校」(1937., pp.14-15) となった。
- (7) このソシユールに由来する用語は、クノーにおいては「語り、喘ぎ、身振りをする大衆」(1955., p.82) と拡大使用されている。
- (8) エスペラントのような《人工言語》は、「見たところ、フランスの言葉の一切の模範、理想、尺度であり続けている[が、実は違う]」(*L.A.*, p.50) とされている。
- (9) 古典主義の書き言葉は今でこそ《死語》と化しているが、「自らを構成

- するにあたって、自然から大いに恩恵を受けている」(E.L., p.186)。クノーが「人々は常に古典作家を過去の中に見るが、彼らを未来の中にも見る必要がある」(E.L., p.185)と語るのも、ここから理解されよう。
- (10) 正確に言えば、「ロマン主義は、[16世紀の]プレイヤッド派の詩人たちの指針に則って、その [=18世紀のフランス語の] 語彙を補完したにすぎない」(1955., pp.70-71)。真に《破壊的》だったのは、後に見るように、ロマン主義以降の文学である。
- (11) ロラン・バルトも「周知のようにマラルメの努力のすべては言語の破壊に向けられたのであって、文学はいわば言語の屍体にすぎなくなるはずだった」(*Op. cit.*, p.8)と述べている。
- (12) Voir 《Q.A.》, p.90.
- (13) もうひとつの分譲先は《政治》であった。しかし、これもクノーにとっては《言葉》の問題としてとらえられている。「本物のプロレタリアが本物の言葉で書いたことも時にはあった。しかし、彼らのごく稀だ。話された言葉で書いた(書こうと試みた)のは、ほとんどいつも、ブルジョワたちである」(O.C., p.54)。
- (14) 別のところでは、「こうして文学は、[……]映画やラジオのように、単なる気晴らしと見なされるようになった。それも、安上がりな気晴らしと」(Q.A., p.91)と述べられている。もっとも、ここで《安上がりな気晴らし》とは、物質社会において「せいぜいのところ25フラン」(Q.A., p.91)で売られる《本》ではあるが。
- (15) 特にクノーはシュールレアリスムには手厳しい。「よく吸収されていない科学と詩の混合物、あまり理解されていない精神分析と社会的作用、自分の欲望に都合のいいように調整されたマルクス主義と見せ掛けだけの弁証法、これらのものの寄せ集めもまた文学ではなかろうか。しかも、まさに語の最も悪い意味での」(A.C., pp.64-65)。
- (16) これは文学に限らず、《知的流行》一般も同様である。「流行の意味は生まれては消えることである。それは一瞬を目指す。しかるに、知的流行は

持続したいと望むという不幸を有している。[……] 最近の [歴史の] 動向が大衆に到達したそのやり方は、逆に、この蜉蝣のように儂い性格をもって現れ、その効果は、それ故、見せ掛けだけの虚しいものとなる」(M.I., pp. 62-63. 強調はクノー)。

(17) Voir 《L.A.》, p.51; 《C.G.R.D.》, p.45.

(18) デセーニュはクノーに対して、この《離婚》が、「大衆は生きた言葉で新しい詩が啓示されることを期待しているにもかかわらず、知識人は思想の役人然とした一種の死語を書いている」(C.G.R.D., p.39) ことに由来しているのではないかと問うている。

(19) ロラン・バルトはクノーの《口語のエクリチュール》についてこう語っている。「そこから、あたらしいヒューマニズムの可能な領域が描かれるのが見られるだろう。現代文学の全体を通じて言語を襲っている一般的な嫌疑に、作家のロゴスと人々のそれとの和解がとってかわるということだ」(Op. cit., p.78)。

(20) クノーは、純粹主義者に対して、そもそもフランス語は語尾変化や異態動詞などを失った「ラテン語の貧困化」(1955., p.73) から誕生したのだと反論している。それにまた、《ネオ＝フランス語》は、結果的に、伝統的文語をも《擁護》することになる。「正確でアカデミックなフランス語の信奉者たちは、あくまでそれが唯一のものであって欲しいと望むならば、その墮落を防ぐことはできないであろう。逆に、新しいフランス語に、ネオ＝フランス語に、新しさのもつダイナミズム、新しさの膨張の一切を委ねるならば——一方の不純性は他方の正確さとなるのだから——、この時、本来の意味でのフランス語は、時間の攻撃を免れ、その永遠の純粹さを保つであろう」(1955., p.67)。

(21) クノーによる綴り字の試案については、《1937》, pp.22-23. を参照のこと。

(22) 今回はクノーをしてフランス語の改革、というよりも、ネオ＝フランス語の創造へと向かわせた言語思想を問題としているので、具体的な方策と、

その実際的応用としての《詩的言語》については、別の機会に考察したい。

(23) 「ラジオは——人間の顔が見えないので——こういった影響は持たない」(C.E.F.M., p.224)。